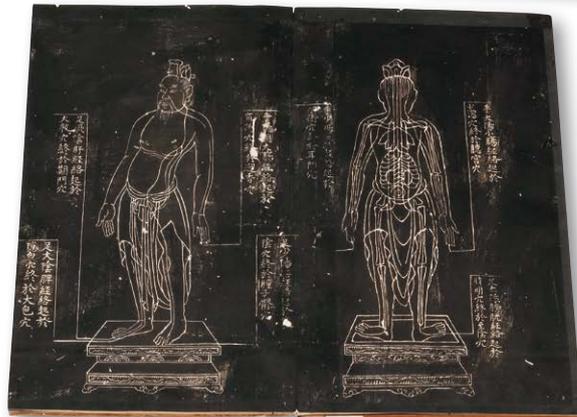


蓬 左

HÔSA



銅人腧穴鍼灸圖經

令和四年度蓬左文庫講演会

蓬左文庫の六国史

——徳川義直の学問の志向性

名古屋市立大学特任教授 吉田一彦

六国史の写本

蓬左文庫所蔵の典籍のうち、日本古代史に関わるものから順に再調査し、その書誌と特色をより明確化しよう。そう考えて、二〇一七年、愛知県在住の古代史研究者が参集し、「蓬左文庫典籍研究会」を結成して、所蔵典籍の調査・研究を進めてきた。関係の典籍を順次拝見していく中で、私はあることに気づいた。それは、「六国史」の写本が立派で、充実していることであった。「六国史」とは、よく知られるように、『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』のことで、古代国家が編纂した六部の歴史書の総称である。これらは古代国家が力を入れて作成したもので、今日においても日本古代の歴史を探究する基本史料になっている。

蓬左文庫の六国史の中で最も著名なものは、鎌倉時代書写の『続日本紀』で、金沢文庫旧蔵の古写本(卷子装)である。それが、頼慶、快運の手を経由して、徳川家康の所蔵となり、さらにそれが家康の子の徳川義直(一六〇〇～一六五〇)

に相続されて、蓬左文庫に伝蔵されるようになった。これは、全四十巻のうち巻十一～巻四十が金沢文庫旧蔵本で、現存最古の『続日本紀』写本として知られている。なお、巻一～巻十は慶長十九年(一六一四)の補写本である。

次に、『日本書紀』神代卷(二冊)が注目される。これは、奥書に「神代上下巻、依大久保石見守長安殿命、以累家秘本令書写之同加朱墨両点註。猥莫許外見矣。慶長己酉季夏吉曜日。神祇管領長上從二位ノ卜部朝臣兼見(朱印)」とあり、ここから、慶長十四年(一六〇九)、家康の家臣の大久保長安の殿命によって、卜部兼見(吉田兼見、一五三五～一六一〇)が卜部家の秘本を母本に書写したものであることが知られる。卜部家には『日本書紀』の善本が伝来しており、家康はその写しを希望し、兼見によって書写・加点がなされた。それが家康蔵本となり、のち義直に相続された。



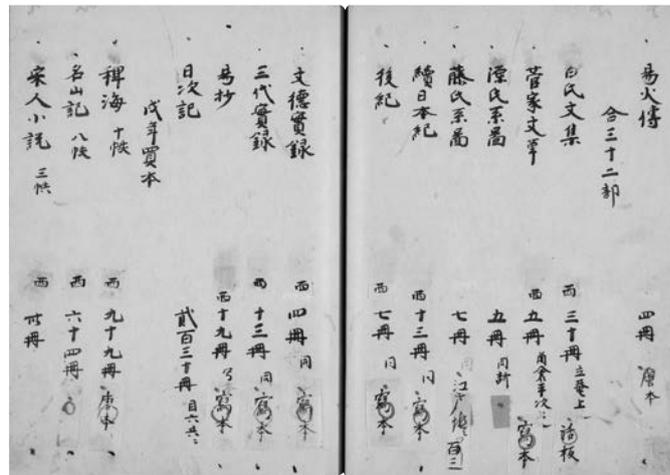
『日本書紀』神代巻 上 蓬左文庫蔵

先の『続日本紀』も、この『日本書紀』も、ともに家康から義直に分与、相続された「駿河御譲本」である。蓬左文庫には、さらにこれとは別本の『日本書紀』続日本紀』が複数本所蔵されており、この二書が重視されたことが知られる。また、『日本書紀』の注釈書である一条兼良『日本書紀纂疏』(六冊)の室町時代の書写本も所蔵されている。

角倉素庵、平次の尽力

蓬左文庫には、『続日本紀』の興味深い写本がもう一つ所蔵されている。そちらは冊子本で、十三冊からなり、巻一の奥書に「考本云永正十二年閏二月三日書之。元和八壬戌年仲夏廿日以実隆公自筆本考了同日加句読。西山期遠子」とある。ここから、この本が角倉素庵(一五七一～一六三二)が元和八年(一六二二)に、三条西実隆(一四五五～一五三七)の自筆本を用いて校合した本であることが知られる。「西山」期遠は素庵の別号である。吉岡眞之氏の研究によると、この奥書は他の素庵の筆跡と合致し、またこの写本の他の多くの書き入れも素庵の筆跡と見てよいという「吉岡一九九四」。蓬左文庫の書籍目録である『御書籍目録 地』(寛永)によると、この本は角倉平次の献上によって蓬左文庫に入ったものであり、それは「西年」すなわち寛永十年(一六三三)のことであった。平次は素庵の次男である(なお「成年買本」は前を受

けるのではなく、後ろにかかっている。『続日本紀』などは前を受けており、「酉年」に文庫に入っている。吉岡氏は戌年とするが酉年とすべきである。



『御書籍目録 地』(寛永)より 蓬左文庫蔵

角倉素庵は、角倉了以(一五五四～一六一四)の子で、父の事業を継承、発展させ、土倉にして朱印船貿易家として活躍し、大堰川(保津川)や高瀬川の河川開発を行なったことでも知られている。彼は学問に傾倒し、藤原惺窩(一五六一～一六一九)に師事し、林羅山(一五八三～一六五七)、堀杏庵(一五八五～一六四二)らと交友した。特に、晩年は学究生活をもっぱらとし、

蔵書数千巻を所蔵したという「林屋二〇一七」。素庵は寛永九年(一六三三)に死去し、その翌年、彼が校注を書き込んだ『続日本紀』が、子の平次によって義直に献上された。それは義直が計画していた『類聚日本紀』の素材となるべく作成されたものであった「吉岡一九九四」。

この年は、また平次によって、『菅家文章』『源氏系図』『藤氏系図』『後紀』『文徳実録』『三代実録』が義直に献上されたことが、『御書籍目録 地』(寛永)から知られる。このうち『後紀』『文徳実録』『三代実録』は六国史の三つである。この『後紀』は大平和典氏によれば、『日本後紀』ではなく、『続日本後紀』のことと理解されるという「大平二〇一八」。従うべき理解と思われる。ただ、平次献上の『続日本後紀』は蓬左文庫に現存していない。一方、平次献上の『文徳実録』『三代実録』は今も蓬左文庫にある。これは丁寧に作成された大型の本で(『日本三代実録』第一冊は三一・六×二二・八cm)、献上者の誠意が滲み出る美本になっている。

失われた『日本後紀』をもとめて

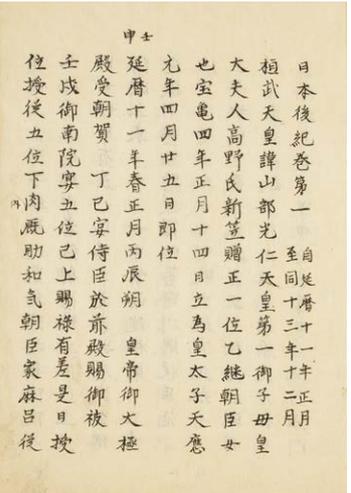
六国史のうち、『日本後紀』は、十五世紀の応仁の乱の頃に多くの巻が散逸してしまい、その後どこかにないか、探し求める努力が続けられた。ようやく、十八世紀、三条西家に全四十巻のうち十巻だけ存在することが確認されたが、その本も広く流布することはなく、幕末に至った。現在

も、私たちはその十巻分だけを見ることができ、他の巻については諸書から逸文が収集されるのみで、残念ながら全貌はわからなくなっている。

蓬左文庫には、『日本後紀』が所蔵されている。これは冊子本で、全二〇冊からなっている。ただし、「蓬左文庫蔵書検索システム」は、これを「日本後紀(偽撰)二〇巻二〇冊/写本/江戸末期」としている。この本は、後述の徳川義直編『類聚日本紀』全一七〇巻から『日本後紀』該当部分(巻七十一～九十)の二〇巻分を抜粋したもので、「推定復元『日本後紀』」とも呼ぶべきものであり、『類聚日本後紀』の名称で流布する本もある(愛知県図書館本など)。題材とした史料は、大平和典氏によれば、『類聚国史』『日本紀略』『類聚三代格』『公卿補任』『元亨釈書』『続日本後紀』『経国集』『新撰姓氏録』『釈日本紀』であるという「大平二〇一八」。これは、したがって「偽撰」といえるし、そう評価すべき本ではあるが、一方で『日本後紀』推定復元本の一つともいえるものになっている。ただし、出来栄えは残念ながら芳しいものとはならなかった。

徳川家康の学問の志向性

徳川家康は、よく知られるように読書・学問を重視し、多数の書物を収集・所蔵した「丸山二〇二二」。家康の侍医だった板坂卜齋(一五七八～一六五五)の『板坂卜齋覚書』には、「根本、詩作・歌・連歌は御嫌ひにて、論語・中庸・史記・



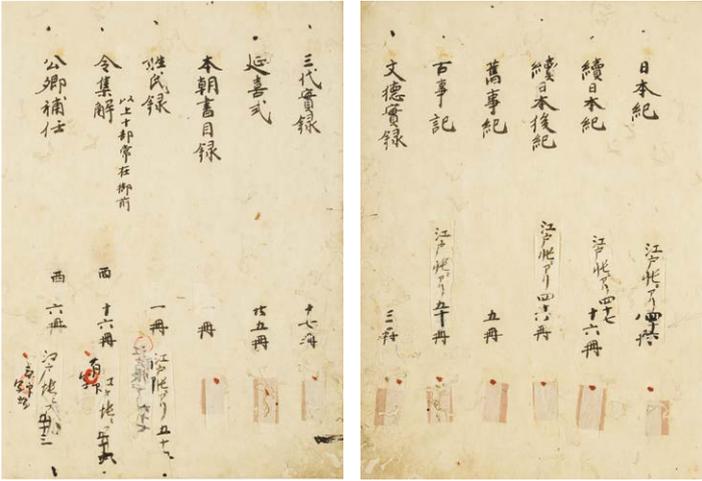
『日本後紀』第一冊冒頭部分
蓬左文庫蔵

漢書・六韜・三略・貞觀政要。和本は延喜式・東鑑也。其外色々、大明にては高祖の寛仁大度を御褒め、唐の太宗・魏徴を御褒、張良・韓信・太公望・文王・武王・周公、日本にては頼朝を常々御咄なされ候」とある。これによれば、家康は詩歌は嫌いだったが、中国の儒教の書、史書、兵書、政務書をよく読み、和書としては、『延喜式』『吾妻鏡』を重視したという。また、政治家としては、中国の著名な人物たちと並んで、日本では源頼朝に強い関心があったという。家康の学問の志向性は、今日の学問区分でいうなら中国史と中国政治思想史、および日本中世史ということになるのか。家康は、晩年、本の出版事業を行ない、『吾妻鏡』や、唐の太宗が魏徴らに命じて編纂させた『群書治要』などを刊行した。

徳川義直の学問の志向性

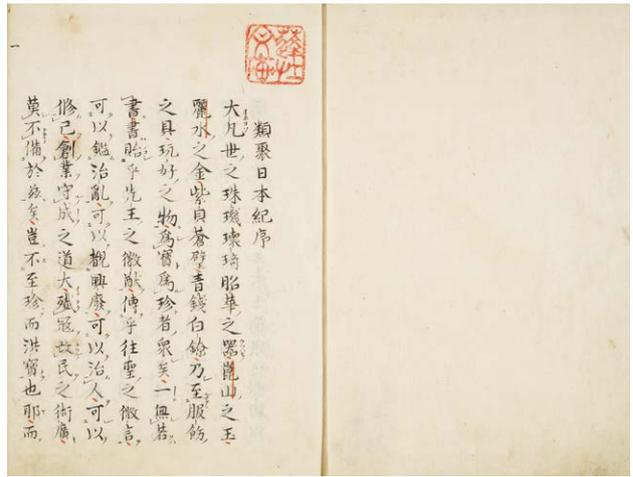
義直は、父の学問尊重の精神を継承した。だが、私見によると、家康と義直には学問の志向性

に若干の差異があるように思われる。いや、その差異は小さいように思われて、実は大きな思想の差異だったと見るべきなのかもしれない。先にも見た『御書籍目録 地』(寛永)には、その冒頭、義直の御前に常に在った十部の書物が列記され、「以上十部常在御前」との注記がなされている。その十部とは、『日本書紀』以下の六国史と(ただし『日本後紀』を除く)、『旧事紀』(先代旧事本紀)、『古事記』、『延喜式』、『本朝書籍目録』、『姓氏録』(新撰姓氏録)であった。義直の学問の志向性は、今日の学問区分でいうと日本古代史にあり、とりわけ六国史に強い関心があった。



『御書籍目録 地』(寛永)より 蓬左文庫蔵

義直は自らも書物を編纂、著作した。その代表作は『類聚日本紀』『神祇宝典』で、どちらも正保三年(一六四六)の成立である。また、他にも『御年譜』『初学文章』『軍書合鑑』『成功記』を撰述した。このうち、『神祇宝典』は伊勢神宮をはじめとする諸神社の祭神についての研究書で、義直が日本の神社とその祭神に強い関心を有していたことが知られる。『御年譜』(東照大神君年譜)は家康の詳細な年譜で、やはり正保三年の成立である。『成功記』は家康の種々の業績を記した事績録である。また『軍書合鑑』は和漢の軍書を引用しながら武將の心得を説く兵法書であり、『初学文章』は修身、軍事、治国、礼法、神社、葬事などについて、初学者のために仮名で記した書物である。中で、特に注目されるのは『類聚日本紀』全一七四巻である。これは六国史の本文をつなぎ合わせて一書としたものである(ただし『日本後紀』部分は推定復元)。義直は、この書物をいかなる目的で作成したのか。本書の「序」を見ると、委曲を尽くした修辭と、「天壤無窮の神勅」に言及するような学識溢れる名文になっているが、ただ本書作成の目的を明快に説くものにはなっていない。一体、何のためにこの書物を作ったのか。本文を連結させるだけなら、『日本書紀』から順に各巻を並べても同じことなのではないか。筆者には、便宜のために作成されたとは思われない。だとすると、義直は『通史』を作成したかったのではないか。今はそう憶測している。



『類聚日本紀』冒頭部分 蓬左文庫蔵

なお、この書物の撰述に関与したのは、近松茂矩^{ちかまつしげ}『昔咄』^{むかしばなし}によれば、深田正室、竹野安齋、堀勘兵衛であったという。田辺裕氏は、彼らに加えて堀杏庵が深く関与しているのではないかと推定している。また、本書「序」について、田辺氏は林羅山による代作だろうと説いている[田辺一九七〇]。筆者も、「序」の修辭・学識から見て、学者による代作と見る説を支持したい。なお、『類聚日本紀』は正保三年に完成したが、公刊がなされず、むしろ秘された。本書の最初の刊行は、昭和十四年(一九三九)になってのことで、尾張徳川黎明会によって和装の複製本として公刊された。

義直は、家康が中国政治思想史や日本中世史

に関心を寄せたのとは対照的に、日本古代史に強い関心を持った。彼は朝廷尊重の政治思想を持ったが、それは彼の学問の深化とともに形成されていったものと理解される。

義直の思想の継承——むすびにかえて

尾張藩では、その後、義直の学問の志向性が継承され、日本古代史の研究が隆盛した。そして、吉見幸和(一六七三〜一七六一)、河村秀興^{ひでき}(秀頼、一七一八〜一七八三)、河村秀根^{ひでね}(一七二二〜一七九二)、河村益根^{ますね}(一七五六〜一八一九)、神村正鄰^{まさちか}(一七二八〜一七七一)、稲葉通邦(一七二八〜一八〇二)、石原正明(一七六〇〜一八二二)などの多数の学者たちが活躍し、研究書が作成された。河村秀根・益根による『日本書紀』の注釈書『書紀集解』^{しよきしゅうかい}はよく知られている。また、稲葉通邦は『類聚日本紀』および『神祇宝典』の校合作業を担当したという。榎英一氏は、こうした尾張藩の学問の特質を『尾張名古屋の古代学』[榎一九九五]と表現している。

義直は読書・学問を重ね、しだいに朝廷尊重の政治思想を熟成させていった。そしてそれが後代へと継承されていった。近松茂矩『円覚院様御伝十五箇条』は、第四代藩主徳川吉通(一六八九〜一七一九)の遺訓を伝えるものであるが、そこに「源敬公御撰の軍書合鑑巻末に依王命被催事」とある。こうした「王命」尊重の思想、すなわち天皇・朝廷を尊重する思想は、尾張藩に

おいて一つの伝統思想となつて伏流していった。それは平時には深く沈潜して表面化してこないが、幕末維新期のような激動の時代になると、地底のマグマが噴出するように基底部から表層部へとたち頭れてくる。明治元年(一八六八)一月、青松葉事件が起こった[羽賀祥二二〇二二]。これは、徳川慶勝らの意志により、「朝命」を掲げて、尾張藩累代の重臣たちのうち佐幕派の立場をとる者たちを抹殺・排除した事件であった。尾張藩は、徳川御三家筆頭なのに、幕府側ではなく、朝廷側に左袒^{さたん}した。これにより、新政府軍はすんなりと江戸へと進軍していった。

この出来事は、その後の名古屋の運命を決定づけることになった。明治以降、名古屋は旧徳川御三家の地であるにも関わらず、大いに発展するが、それは幕末維新期のこの政治選択と密接に関係していると思われる。そして、それは、早く初代藩主徳川義直の思想傾向に規定される部分があるのだろうと筆者は考えている。

【参考文献】

- 大平和典『日本後紀の研究』国書刊行会、二〇一八年。
- 田辺裕『類聚日本紀』の成立『神道史研究』一八―四、一九七〇年
- 名古屋博物館編・榎英一執筆『尾張名古屋の古代学』一九九五年
- 羽賀祥二『青松葉事件』『蓬左』一〇二、二〇二二年
- 林屋辰三郎『角倉素庵』吉川弘文館再刊、二〇一七年
- 丸山裕美子『徳川家康による古典籍の蒐集』『愛知県立大学日本文化学部論集』一三、二〇二二年
- 吉岡眞之『古代文献の基礎的研究』吉川弘文館、一九九四年

鸚鵡籠中記と千代倉家日記(補遺)

◆孫の誕生

宝永六年(一七〇九)六月、娘おこんに、御林奉行水野権平(勘太夫)の息子、久次郎との縁談話が持ち上がり、年の瀬も迫る十二月二日、めでたく婚姻の儀が執り行われた。翌年夏には文左衛門(當時はすでに定右衛門と改名していた)が娘の嫁いだ春日井郡水野村を訪れ、預かりの鹿や水野家の廟所を見学し、山中の風光を楽しんだ。さらにその後、正徳元年(一七一一)には朝鮮通信使一行の行列見物、同三年(一七一一)には東照宮祭礼の棧敷での見物と、水野から娘おこんとともに勘太夫・久次郎父子がそろって名古屋を訪れており、両家のつきあいはにぎやかであった。

そんな中、結婚から七年ほどたった享保二年(一七一一)七月十一日、里帰りしていたおこんは無事に男子を出産。亀之助と名付けられた。母子は一月半ほど里の朝日家で過ごした後、八月二十七日に水野へ帰っていた。初孫の様子はいかに、と気になったのであろうか。文左衛門は年末、師走の朔日に水野を訪れ、久しぶりに孫の元気な顔を見ることができた。

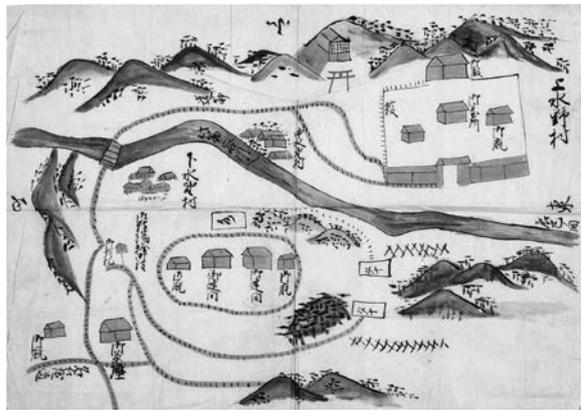
おこん、息災。亀之助随分きげんよく成長せるを見、甚悦び楽しむ。

当日の日記は続いて、水野山中の冬景色を次の

ように記す。

左は山、右は清水流、どこのきより白銀雪花と噴さま、八畳岩其外、巨岩奇石、万景筆紙に不及。甚目を悦しめ、申半比帰り、風呂へ入、其後、麦切、鴨なんど満腹、酒心よく給。

若い頃から酒の飲み過ぎで何度も体調を崩した文左衛門も、この日の酒はことのほかおいしく賞味できたようである。



▲水野村狩場・殿舎図 (名古屋市博物館所蔵)

正徳3年の水野御殿取り壊し以前の様子を描く。水野川をはさんで右上が御殿(中央に御台所・右に御厩)、左下が水野家の屋敷(左右に御厩・中側に御建間2棟)

おこんが結婚した翌年に訪ねた時はまだ藩祖義直が建てた水野御殿(山中で狩りを行う際の休憩所)が健在であったが、四代藩主吉通の時に簡略(財政緊縮)の方針に従って廃止となり、再度訪れたこの時にはすでになくなっていた。

文左衛門の日記はこの年の年末で終わっており、

翌年九月、御豊奉行在職のまま、この世を去った。朝日家はその後実子の跡継がおらず、二代続いて養子を迎えたが、残念ながらその後は絶えてしまった。文左衛門の家系で残ったのは亀之助のみである。

◆その後のファミリーヒストリー

亀之助が生まれた水野家はもともと、現在の瀬戸市水野一帯を根拠とする在地武士で、古くは織田信長・信雄に仕えていた。徳川の世となって尾張藩初代藩主義直が名古屋入りした後、「水野案内之者」として、義直に仕えることとなった。この「水野案内」とは、藩主が鹿狩・猪狩等を行う際に、山中を案内し、その狩を手伝う役目のことである。このことから、一般に水野家一統は「案内衆」とも呼ばれた。

義直に仕えたのは勘太夫の祖父にあたる致番(致重とも)からで、あわせて御林奉行として尾張領内の山林の管理も担当した。また、田畑の作物に被害をもたらす猪や鹿、さらには時折人里に出没して人畜に被害を与える狼への対処も重要な職務であった。

例えば、宝永七年(一七一〇)夏、春日井郡篠木辺に出没する狼・山犬を国奉行配下の者が退治しようとしたが果たせず、「御国奉行の首尾悪敷」(鸚鵡籠中記)という状態にあった。このため、久次郎の父、勘太夫をはじめ水野案内衆の出番となり、「水野勘太夫手之御案内者大狼二つを撃、其後鎮る

也」(編年大略利)となった。山の事情や動物をよく知る集団として特異な地位にあったといえよう。

この勘太夫の孫でもあった亀之助はその後すくすくと成長し、「享保十六年亥九月二十九日(数え十五歳)章善院様(七代藩主宗春)江初而御目見」[同十八年丑九月十五日(数え十七歳)御林奉行見習被仰付]。以後、異母兄である代助(軍記とも)に従って御林方の職務を学んでいった。水野の山中を駆け回る若者の姿が目につかんでくる。

亀之助の父、久次郎は正徳六年(一七一六)四月二十八日、その父勘太夫の跡を継いで御林奉行となり、享保十六年(一七三二)七月九日、病気で退役願いを出すまでその職にあった。その後は亀之助の兄である代助(軍記)が跡を継いだ。元文三年(一七三三)三月二日、「勤方不品行跡二付」御役御免となった。その一ヶ月後には家を立ち退き、行方知れずとなってしまった。さらに弟の亀之助も同年三月四日「見習御免被遊」。父久次郎は享保二十年(一七三五)この世を去っており、「水野案内之者」の役職を解かれた水野家は存亡の危機にあった。

幸いにもその一年後、水野家は復活を遂げる。元文四年七月三日、亀之助は権平の名を引き継ぎ、御林奉行となった。数え年弱冠二十三歳の若き奉行の誕生である。水野家の記録「文化九年正月書上水野家系譜下書」(瀬戸市史資料編四近世所収)では「水野ニおゐて代々相勤来筋目之由にて、「士林浜廻」にも同様に「於水野代々御奉公相勤来候継目者二候故」と記される。特殊な職能集団とし

て、やはり必要だと判断されたのであろうか。あるいは、この元文四年は、正月十三日に七代藩主宗春が謹慎蟄居させられた年でもある。兄代助の失脚から弟亀之助の奉行就任まで、用人支配にあった御林奉行が一連の藩主にまつわる騒動に巻き込まれたと考がえるのは穿ちすぎであろうか。それはさておき、御林奉行に就任した亀之助改め水野権平は、意外なところにその名を刻んでいる。奉行就任の翌年のことである。

元文五年四月二十六日、鳴海の下郷家当主は三代目の蝶羽(本名季雄、二代目知足の長男)であったが、その日記に次のように記される。

御林奉行今井七右衛門殿、水野権平殿立寄
鼠灯台御所望。

鼠灯台とは、下郷家が所蔵する鼠形の灯台で、鼠の体内に油を蓄えるようになっており、皿の油がなくなると鼠の口から油がしたり落ちるといいうからくりの灯明具である。同家初代の久宗が京都のとある寺が所蔵するものを見ていたく感心し、

自作したものと伝わる。ことの真偽はともかく、古くは元禄六年(一六九三)三月五日、二代藩主光友が江戸へ参勤交代で向かう折、本陣へ持参して上覧に供している。

水野権平の鼠灯台拝見所望は、おそらく下郷家来訪のきっかけ作りで、就任挨拶を兼ねたものだったと推察される。鳴海村内にも藩管理の御留山が古くからあり、また光友以来、延宝七年、貞享五年、元禄二年、五年と細根山を始め鳴海の山々で鹿狩も行われている。また元禄八年四月には「猪鹿出、麦、大豆畑荒ス。依之、御案内衆兩人、一昨夕より御越。鉄砲打」(知足日記)と害獣退治もおこなった。下郷家とは久次郎の祖父、久之丞の時代から長くつきあいがあったのである。

権平(亀之助)の諱は正興。安永四年(一七七五)八月、六十歳で病死するまで御林奉行の職にあった。その跡を継いだのは、正興の息子で幼名惣次郎、長じて権平を名乗り、安永四年十月から文化七年(一七一〇)十二月、隠居するまで御林奉行を務めた。この間、天明元年(一七八一)以降は水野代官も兼務し、寛政二年(一七九〇)以降は鳴海代官次座にもあつて、さらに濃州の山林も管理するなど、幕末まで水野家の隆盛を不動のものとした。江戸と名古屋を往来する藩要人の出迎え・見送りもその職分の内であり、こうした点からも、御林奉行水野家と鳴海村惣年寄下郷家は代々にわたって長くその交流が続いたのである。



▶鼠灯台と内藤東甫筆の掛け軸(個人蔵)

(蓬左文庫 井上善博)

銅人臉穴鍼灸図経

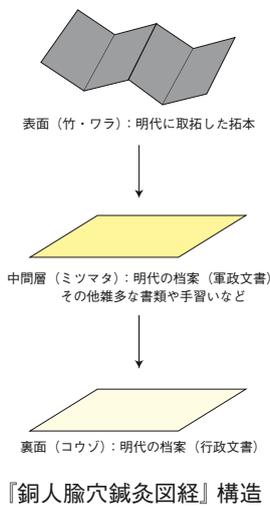
北宋・仁宗(一〇一〇—一〇六三)の侍医であり尚葉奉御であった王惟一が、詔を受けて記した鍼灸医学書。これを刻した石(天聖刻石)は国都開封の医官院に設置された後、元代に北京へ移設されたが、摩耗が著しいため、明の正統八年(一四四三)に英宗の御製序をつけて重刻された(正統刻石)。天聖刻石は、明代に紫禁城城門の建材として再利用され近年発掘されたが、正統刻石は亡失している。蓬左文庫に残る拓本(蓬左本)は、宮内庁書陵部本と並び、亡失した正統刻石から採拓された稀少な拓本である。また、第一帖の「敬公御遺愛之書」と記された題簽、第十帖の巻頭冒頭に捺された蔵書印「尾陽文庫」(朱文方印)、及び蔵書目録等の記述から尾張徳川家初代藩主徳川義直(一六〇〇—一六五〇)の蔵書であったと考えられている。

近年研究チームが進めてきた調査によって、蓬左本の裏打紙に用いられていた文書が明代の官文書(档案)であることが判明した。档案は保存期間が満了すると廃棄されるのが通例であるため、実物が現存することは奇跡的なことである。蓬左本には、主に中央官庁で作成された人事記録や倉庫の管理記録、軍政文書といった明代の官僚の人生や行政システムを物語る記録が残されており、今後の研究展開によつては、従来とは全く異なるレベルの新たな

知見が見出される可能性を秘めている。

今年度実施した科学調査によつて、さらに構造や使用料紙の成分についても研究が進みつつある。紙片の成分分析と、顕微鏡による料紙の繊維観察によつて資料全体の構造やそれぞれの層で用いられている料紙の成分が特定された(左図参照)。ミツマタやコウゾを含む紙は、明清時代においては上質紙で、皇帝からの命令文や中央官庁から発給される公文書など重要度の高い書類にも多く使用されていることから、蓬左本に残存している档案も、中央官庁で作成されたものだとすることを裏付ける結果が得られた。

現在も研究チームによる調査は継続中で、より一層の研究の深化が期待されている。成果の一端は『蓬左』でも今後随時紹介していく。(蓬左文庫 星子桃子)



【参考】

丸山裕美子「蓬左文庫所蔵の明拓『銅人臉穴鍼灸図経』について」『Tribunal』Vol.2No.2(森ノ宮医療学園、二〇二二)及び、井上充幸(立命館大学教授)・辻正博(京都大学教授)・丸山裕美子(愛知県立大学教授)・小島浩之(東京大学大学院講師)・高島晶彦(東京大学史料編纂所技術専門職員)・猪俣貴幸(立命館大学大学院)ら研究チームの調査に拠った。

蓬左通信

二〇二三年は、いよいよ大河ドラマ「どうする家康」(NHK)が始まります。当館も家康イヤーを盛り上げるべく、年度末の企画展「読み解き 近世の書状」を皮切りに、家康ゆかりの史料や作品を展示していきます。

現在、三冊目の『青窓紀聞』の刊行準備の真っ最中。異常気象や怪奇現象、色恋沙汰などなど：真偽は定かでないものの、江戸時代の庶民の生きざまを感じられる史料が盛りだくさんです。なんと今年度中には発刊したいと思っています。

当館は現在、Twitterで情報発信しています。展覧会のご案内、新規入荷した開架図書のご紹介、他館での所蔵資料展示のご案内などフレッシュな情報は勿論のこと、閲覧室の使い方や各種サービスについても随時発信していきたいと思っております。ぜひ「フォロー」「いいね」をお願いします。

(蓬左文庫 星子桃子)

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> <蔵書検索もできます。>

ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※催事により変更することがあります。

■展示室/【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料 館外貸し出しはいたしません。

【開架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込みも可。

